平城京東市に関する覚書

池田 裕英

はじめに

「藤原京」の成立は、官人層が集住する京域が伴ったという点からみても日本の都城を考えるうえで重要な契機であろう。その人口は不明な点が多いが、次の平城京は7万から10万人程度と考えられている。それだけの人間を一箇所に半ば強制的に集住させるということは、国家がそこに暮らす人々を食べさせていかなければならないという問題をも生んだと思われる。その意味でも市は都城において、そこに暮らした人々に多大な役割を果したことだろう。

平城京の東西市は文献を中心に研究が進められ、東市が左京八条三坊に、西市が右京八条二坊に推定されていて、その位置についてはほぼ定説となっている。これをもとに奈良市教育委員会が東市跡推定地の発掘調査を継続的に行なってはいるが、未だ検出される遺構・遺物からはなかなか市の実状を窺えるような資料は得られていない。また、古代の都城を構成する要素の一つである「左右の対称性」の点では、平城京東西市の占地は地形上の制約等があって一坊分のズレが生じたとみられるものの、基本的には左右対称の形をとっているとされてきた。しかし、壬生門を中心にみるとこの占地は左右対称とみることもでき、非対称の理由が果して地形的な制約だけであったのかという疑問も残る。小文はこういった視点からの平城京東市に関する覚書である。

Ⅰ　東市跡推定地の沿革と発掘調査

（1）東市跡推定地比定の経緯　平城京東市が現推定地に比定されるに至った経緯については何度となく述べられてはいるが、ここで振り返っておきたい。

最初に東市の所在地の比定を行なったのは関野貞氏である（関野 1907）。氏は字名から辰市村大字杏字辰市を拠り所として、左京八条に東市を比定された。市域については奈良時代の写経所関係文書紙背にある所謂「平城京市指図」から六坪の範囲としたが、坪付には言及していない。その坪付を示したのが西村真次氏で、「市指図」と八条二坊一円の条坊の検討から図に示された六坪を五・六・七・十・十一・十二坪の範囲とされた（西村 1933）。これらの意見に対し、異なった見解を示されたのが福山敏男氏である（福山 1943）。氏は東大寺薬師院に伝わっていた東大寺領東市庄にかかわる文書に相模国調邸が東市の西辺にあり、その調邸が左京八条三坊にあったことが記されていることと、「市指図」との検討から左京八条三坊の五・六・七・十・十一・十二坪が東市域であるとされた。その後、今泉隆雄氏が「市指図」の南2坪分の市の文字が墨抹されていることを明らかにされ、「市指図」に描かれた条坊の検討から左京八条三坊五・六・十一・十二坪が市域であることを指摘された（今泉 1976）。ただし「市指図」は西市にも適用でき、必ずしも東市の場所を示したものとは限らないようであるが、現推定地はこのような研究の成果を踏まえてのものである。

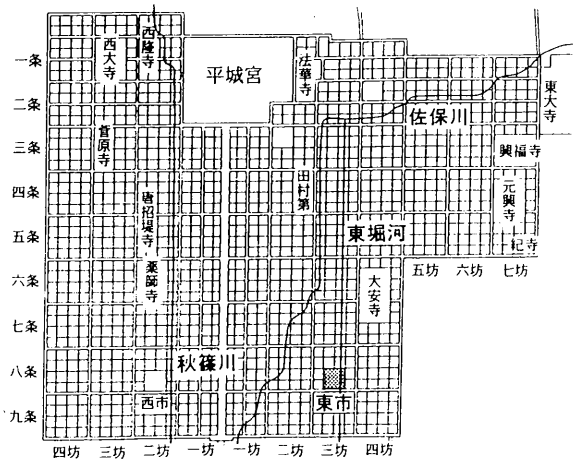

図1 平城京の条坊と東市跡推定地の位置

また、政治的な面からの考察も示されている。中村修也氏は、東西市が経済活動に不便な南に寄っているのは藤原不比等の政治的な力によるもので、旧豪族達の経済活動を抑え、新しい都で自分の管理下による経済を発展させようとしたことによるものとの考えを示された（中村 1990）。これに対し、栗林清和氏は、当時の為政者は商業行為を管理統制することを重視しておらず、宅地班給に主眼があり、その班給が終わった後の残りの地域で適当な場所を選定したと考えられること、市が刑場でもあったという点を重視し、都城形成以前から有していた処刑場としての市の機能をも考慮して市の位置が決められたとされた（栗林 1993）。

（2）東市跡推定地の発掘調査　奈良市教育委員会が1981年以来、東市跡推定地の発掘調査を進めている。この成果は篠原豊一氏により簡潔にまとめられているが（篠原 1997）、今一度確認しておく。

東市跡推定地域では、これまで六坪と十一坪で調査が実施され、特に六坪で重点的に調査が行なわれている[1)]。

六坪では、坪の北西隅で総柱建物が検出され、楼閣であった可能性が考えられている（第１次調査）。北・東辺は築地がめぐり、東辺には中央からやや北の位置に門が開いていた（第１・11・12次調査）。この東辺の築地の雨落溝には上層の埋土に８世紀前半～中頃の土器が多量に含まれていたが、溝が埋まった後に建物が建てられていることから、その頃に築地が廃絶された可能性も考えられる。北半中央には東西棟建物と総柱建物が南北に３棟並んで配されている（第９・10・13・14次調査）。中央部では明確な遺構が検出されておらず、空閑地であったようである（第８・16・18次調査）。西辺中央部では３つの土器埋納土坑もみつかっている（第19次調査）。この坪では建物の重複関係などから奈良時代以降４時期の遺構変遷が考えられているが、遺物に恵まれず、時期を特定した遺構変遷を明らかにするまでには至っていない。遺物は道路側溝や井戸、土坑などから出土しているが、時期的には奈良時代中頃以降のものが多く、量的に多いのは奈良時代後半以降のものである[2)]。なかでも第12次調査で検出した井戸ＳＥ200からは奈良時代末頃に位置づけられる遺物が出土したが、「鯛」と記された墨書土器などと共に漆器の皿や鎌柄、木履、横櫛なども出土している。また、第19次調査では奈良三彩陶枕が出土しており、京内では

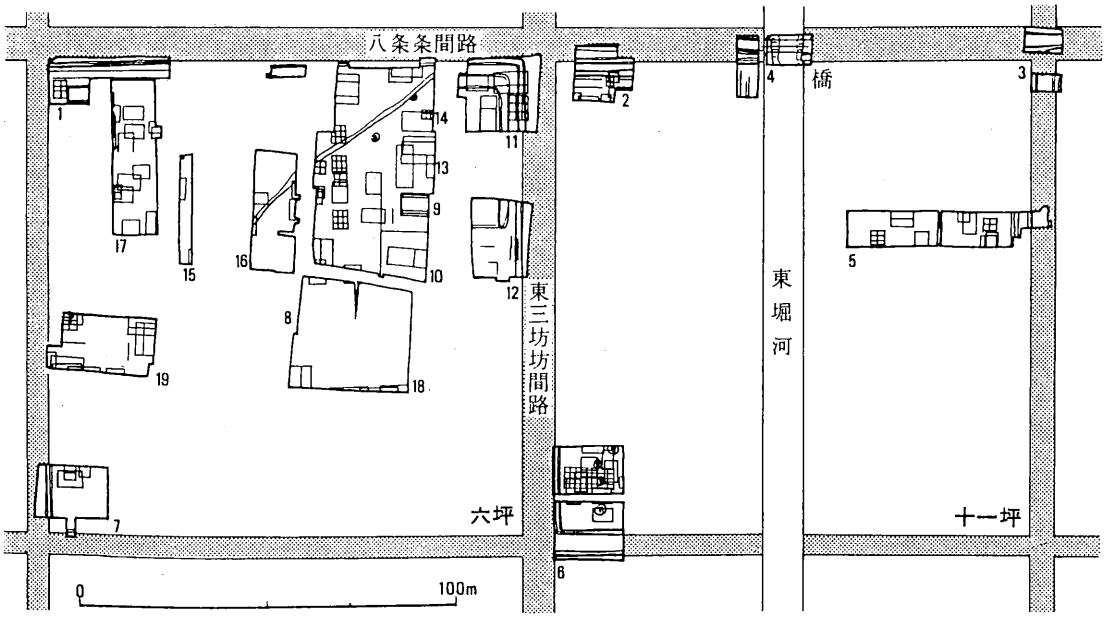

図2 東市跡推定地（平城京左京八条三坊六・十一坪）の遺構平面図（1/2,000）
（篠原1997に一部加筆・数字は奈良市教育委員会東市跡推定地の調査次数）

大安寺旧境内に続き２例目で、注目される。

十一坪では、北辺の築地と北に開く門を検出し（第２次調査）、六坪での成果もあわせると坪は一坪ごとに区画されていたようである[3]。そうであれば、『拾芥抄』にみえる平安京の市と同様の構造となる。十一坪での大きな成果は八条条間路上で幅10mの東堀河とそれに架かる橋を検出したことであろう（第４次調査）[4]。東市の推定北限と交わる位置で八条条間路に架かるこの橋は、層位的に下層堆積中（８世紀後半～末頃）に構築されたとみられ、３回の造り替えが確認されている。東堀河の廃絶は上層出土の土器から９世紀後半から10世紀初頭と考えられている。この東堀河の調査を除けば、十一坪ではまとまった遺物の出土したところはない。

また、東市跡推定地周辺には『拾芥抄』の記述をもとに市町を想定しているが、その一画にあたる十坪では、九坪と十坪を限る坪境小路の南側溝から漆付き土器や塗漆用の刷毛、漆撹半用の箆などが出土し、漆器工房があったと考えられている（奈良県 1976）。西市跡推定地の東に位置する右京八条一坊十三・十四坪でも漆や金属関連の工房があったことが明らかにされており（大和郡山市教育委員会 1990）、市の近くには商品を供給するような工房が存在したことが窺える。また、十五坪の調査では寺院跡が確認された。当地の小字名は「姫寺」であるが、『金光寺縁起』等の記述から平安京の東市の守護神として市姫神社が置かれていたことが知られ、平安京の東市には金光寺と市姫神社があり、『金光寺縁起』には宗像神社の女神である市杵島姫命を市の守護神として勧進したことが記されている。こういったことから田辺征夫氏は平城京にも寺院の境内地に市の守護神が祭られていた可能性が高いことを指摘されている（田辺 1988）。

このような調査成果から、十一坪に市てんや倉を想定し、六坪北半の掘立柱建物が建つ部分を市司の院に相当する官庁の一部とする考えもある（町田 1991）。

Ⅱ　市の占地

（１）各都城の市　ところで、平城京をはじめとした都城では「左右対称の原理」（町田 1991）といわれるほどこの点に関しての「規制」が働いていたとみられるが、前にも記したように平城京の東西市は東市が左京八条三坊に、西市が右京八条二坊に推定されていて、朱雀門を中心にみたとき左右対称にはなっていない。東市は先述した経緯や東堀河との関連が、西市は現推定地に「市田」の字名が残ること、西堀河とみられる秋篠川に沿った地であることなどが現推定地に比定された理由である。東市は文献から左京八条三坊にあったことが推定されることから、西市について、その推定地の西には丘陵がひろがっているため、これより西には位置できなかったとされることが左右非対称の理由と考えられている。果して理由はそれだけであろうか。そのことについてふれてみたいが、その前に平城京前後の都城の市の占地はどうであったかを概観しておく。

「藤原京」では宮北面の中央の門の近くから出土した木簡から宮の北の門を通って市へ行ったことが知られ、市は宮の北に位置したと推定されている。東西市があったか否かは明らかではないが、『扶桑略記』には大宝３年（703）に東西市を立てた記事があり、「藤原京」に二つの市が置かれたのは大宝元年（701）に制定された大宝令以後とする考えもある。この二つの市の場所については左京北一条四坊と右京北四条三坊あるいは四坊に市杵島神社があることから、その付近に想定する説がある（西口 1996）。ここに東西市が想定されるのなら、平城京とは異なり市は宮の北にあり、かつ左右対称の形をとらないことにもなる。

『続日本紀』には、天平13年（741）に平城の二市を恭仁京に遷したこと、延暦３年（784）の長岡京遷都の予兆と考えられている記事の中に「難波の市の南道」という記述があり、恭仁・難

波の二京にも市があったことがわかるが、その位置については不明である。難波の記事では東・西という区別した記述がないことから、市は一つであったのかもしれない。

長岡京では右京七条二坊二町（旧右京六条二坊四町）の調査で、長岡遷都の年である延暦3年（784）12月に「司」から物を進上したことを示す木簡が出土し、そこが「西市司」であった可能性が考えられている。また、この付近を犬川が南北に直線的に流れており、これが運河（堀河）であったようである。そして、これと対称の地である左京七条二坊に東市が推定されている[5]。

平安京では『延喜式』の「左右京図」等から東市が左京七条二坊に、西市が右京七条二坊に想定されている。これまでに市町やその周囲の外町の調査が行なわれ、9世紀前半からの遺構、遺物がみつかっているが、小規模な調査が多く、市の実態を知りうるような成果は得られていない。

このように、平城京以前の市はその所在地すら不明のものがほとんどでよくわからないのが実状であるが、平城京に続く長岡京、平安京の市が左右対称に位置する可能性は高いとみられる。加えて、平城京が造営のモデルとしたであろう唐の長安城の東西市が朱雀門を中心に左右対称となっていることも留意されよう。これらのことや、「藤原京」と平城京以後の都城の設計思想の違い等も考慮すると、平城京の東西市も左右対称であった可能性もあるのではないかと思われ、以下では平城宮との関係に注目し、このことを考えてみたい。

（2）宮と市　これまでの永きにわたる平城宮の調査・研究の結果、宮の中心建物である大極殿は平城遷都当初は第一次大極殿地区にあったが、天平12年（740）の恭仁遷都の際に同宮へ移され、天平17年（745）の平城還都以降に第二次大極殿地区に移ったとの説が定着してきているようである（岩永 1996）。これに伴ない、宮の南面東門である壬生門を一回り大きく造り直して正門としたとみられている（町田 1991）。また、奈良時代後半の史料には朱雀門がみえないが、これは平城還都後は第二次の大極殿が中心となり、壬生門が正門としての機能を高めたためではないかと考えられている（奈良国立文化財研究所 1994）。壬生門の門前の様相にも変化があり、恭仁遷都以前は門前の二条大路北側溝は東西に貫通し、門前面の32m分を人頭大の玉石で護岸・整備した状態であるが、後にこの北側溝の門前部分を埋め戻し、門の東・西端で止まる浅い素掘り溝に改められていて、この造り替えの時期は天平宝字の改作時の可能性が考えられている（奈良国立文化財研究所 1981）。宮の構造をみても、還都後の平城宮は壬生門を入ると東に式部省、西に兵部省があり、北に朝集殿（院）、「朝堂（院）」（太政官院）、大極殿（院）、内裏と続き、それらの西側に「饗宴施設」が置かれるが、この形は内裏の独立、大極殿閤門の存否などの点を除けば平安宮の形態とほぼ共通する。長岡宮の構造の詳細が不明な現段階で即断はできないが、後期平城宮の壬生門以北の形態とその後の宮の朱雀門以北の形態との類似性が認められるのであれば、この点からも後期平城宮の正門が壬生門であったとの説は首肯できるものと思われる。また、壬生門が平城宮の正門とされることによって、東一坊坊間路にも改変が加えられたことも考えられよう[6]。

そこで、壬生門と門から南へ延びる東一坊坊間路のラインを軸にみると、東西市の推定地は左右対称とみることができるのであるが、この点に着目して、この形になったのは壬生門が宮の正門となった時期以降ではないかという点を考えてみたいのである。すなわち、平城宮の中心が東へ移った際に、東市も東西市が左右対称となるように設定し直されたのではないかということである。そして、このように考えると非常に逆説的ではあるが、壬生門が正門とされる以前、大極殿が第一次大極殿地区にあり、朱雀門が宮の中心門であった時期は、東市は現推定地とは異なり、朱雀門からみて左右対称の地である左京八条二坊五・六・十一・十二坪にあったのではないかと

の見方も生じてくる思われる。そして、都が一旦奈良の地を離れ、再び平城へ還ってきた後に宮の中心が東へ移ったことによって、東市も左京八条三坊五・六・十一・十二坪へ移ったと考えるのである。宮中枢の構造に類似性が認められ、部分的にせよ平城京の構造がその後の都城に受けがれているとすれば[7]、平城京の東西市も左右対称であったと考えることもできるのではないだろうか。

Ⅲ　「前期東市」をめぐって

さて、平城宮の構造の変化が京の市の占地にも影響を与えたのではないかという観点から東市が平城還都を境に位置が異なり、左京八条二坊に「前期東市」ともいうべきものがあったのではないかということにふれたが、東市が現推定地に比定されるに至った背景には先述の二つの文書がある。一つは「東大寺薬師院文書」、もう一つは「平城京市指図」である。

「東大寺薬師院文書」には、造東大寺司が平城京左京八条三坊にあった相模国の調邸を購入して、そこに東市庄をおくようになった過程を記した一連の文書があり、4通からなっている。この文書の内容については先学の優れた考察がいくつもあり、筆者にはそれについて詳しく述べる力量もないのでここではふれないが、みておきたいのは文書の日付である。2通の「相模国司牒」にはそれぞれ天平勝宝7歳5月7日、天平勝宝7歳11月13日の日付がある。「相模国朝集使解」には天平勝宝8歳2月6日の、「東西市庄解」には天平勝宝8歳正月12日の日付がある。これらの日付は天平勝宝7歳（755）、8歳（756）であり、また、天平勝宝七歳5月7日の「相模国司牒」の中にみえる日付けも天平廿年（748）で、いずれも平城還都の天平17年（745）以降の日付であることがわかる。

「平城京市指図」は写経所関係文書の背紙に縦横各9本の線が格子状に描かれ、これが条坊道路を示し、その中の6区画に「市」の文字が書かれたものだが、先述のとおり今泉隆雄氏はこのうちの下の2文字が墨抹されていることを明らかにされた。この文書の年代については、福山敏男氏は天平勝宝元年（749）頃とされ、今泉氏は天平初年から天平感宝元年（749）までの間という比較的長い期間を示しておられるが、「憶測を加えることが許されるならば」との但し書きをつけて「紙の利用の仕方を考えると」天平感宝元年に近い時期ではないかとされる。これも平城還都後のものである可能性がある。ただし、先述したようにこの「市指図」は必ずしも東市の場所を示すものとは限らない。このように、東市が左京八条三坊に比定される根拠になった文書はいずれも平城還都以後のもの、もしくはその可能性が強いものであることがわかる。換言すれば、これらの文書に示された「東市」の位置はその時点より以後の位置といえるのではなかろうか。

それでは、当初の東市を想定した左京八条二坊五・六・十一・十二坪はどういった土地であるかということだが、ここは未だ発掘調査が一度も行なわれていない坪で、奈良時代にどのような土地利用がされていたのかを知ることができない。そのようなところに東市を想定するのは無謀すぎるきらいもあるが、この地に東市を考えた場合、市と関連するとみられた東堀河、工房、神社などはどのようになるであろうか。

東堀河は、菰川が奈良時代には現在とは異なり左京八条二坊を南流し、五坪の北西隅を北東方向から南西方向に流れていたと考えられていることから、岸俊男氏はこれを運河（東堀河）として利用することも可能だったのではないかと述べておられる（岸 1974）。この河川の方向の先にあたる左京九条一坊五坪・十二坪では幅12m以上、深さ約3mの奈良時代の河道が検出されている（奈良県立橿原考古学研究所 1986）。市周辺に市町が想定できるのであれば、その一画になる

であろう左京八条二坊四坪で調査が行なわれている（奈良市教育委員会 1982)。しかし、奈良時代末から平安時代初頭の遺構と平安時代末から鎌倉時代の遺構が確認されているものの、奈良時代前半から中頃にかけての遺構はみつかっていない。加えて、この地の字名が杏であり、唐の長安城にあった「杏園」が平城京の条坊では左京八条二坊に相当することから、これとの関連も考えられている。神社については当該地の付近には市杵島神社にあたる神社は残っていないが、市が移ったと考えられるのなら神社も移った可能性もあるであろうし、後述する辰市神社は後の辰市の市神の社地ではないかとの説もある（西村 1933)。左京八条二坊周辺はこのような状況であるが、調査が行なわれていないこともあり、周囲の様子からも積極的に市に結び付くような資料は得られず、今後の調査を待たなければならないというのが現状である。

Ⅳ　東市と辰市

最後に、関野、西村氏が東市を左京八条二坊に比定する際の材料となった「辰市」についてふれておきたい。辰市は平安時代中期に清少納言により著された『枕草子』に「市はたつの市」として記されており、平安時代中頃には辰市が大和の代表的な市の一つであったことが窺える。しかし、平城京の東市が辰市へと変遷したのかといった、その成立過程や位置についても今後の調査によらなければならない。辰市の名の由来は辰の日に市を開いたことによるものとする他、西村真次氏は東市が平城宮の東南にあり、これが方角でいえば辰の方向に当るので、「奈良時代晩期あたりから東市をタツノイチと呼び慣らしたようなことはなかったか」と述べておられる。しかし、大井重二郎氏が明らかにされたように、辰市の地名は左京八条二坊、三坊にはみえずにその周囲にみられ、かなりの広がりを示しており、氏は「辰市は東市址に集中したのではなく、（中略）東市址を中心に周囲数町に延拡分散して店肆が発達して行ったのが中世の姿であった」と述べておられる（大井 1974)。この点については疑問もあるが[8]、現在東市跡推定地として調査を進めている左京八条三坊六坪の地は平安時代末頃には畠地となってしまっていたことは大井氏

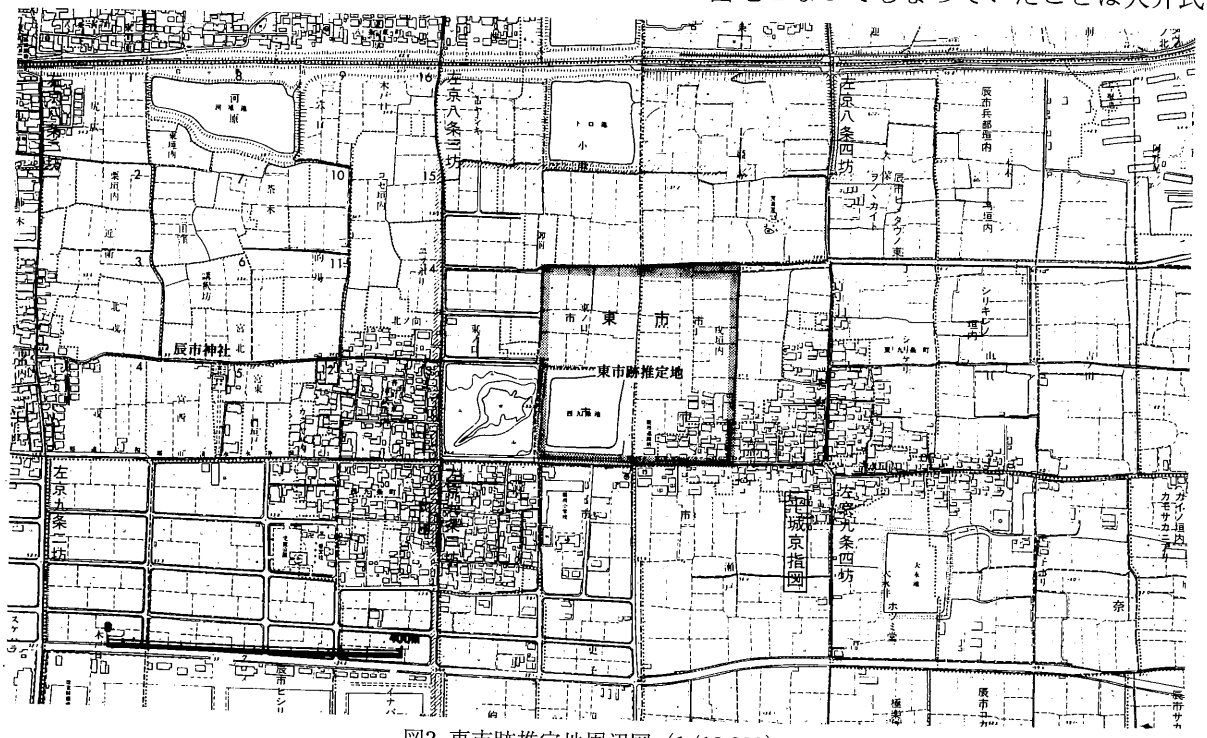

図3 東市跡推定地周辺図（1/10,000）
（『大和国条里復原図』奈良県立橿原考古学研究所編1980に加筆）

が明らかにした通りである。この地の平安時代以降の遺構としては、9世紀前半から中頃の井戸(第13次調査)、10世紀中頃の井戸（第14次調査)、13世紀の井戸、土坑（第11次調査)、16世紀の井戸（第18次調査)、江戸時代の木棺墓（第8次調査）がみつかっている。十一坪では、9世紀中頃の井戸・13世紀中頃の井戸、土坑（第6次調査）がみつかっており、東堀河からは8世紀から10世紀初頭までの土器が出土していて堀河の廃絶時期がこの頃であることがわかる（第4次調査)。六坪で行なった第11・13・14次調査、十一坪で行なった第2・4次調査は調査地が近接しており、この周辺では生活の痕跡がみられるが、これより以南では、平安時代以降の遺構があまり検出されていないことから、史料にみられるような状況であったのではないかと考えられ、長岡遷都以降、東市域のうちでもこの地は水田化していったものと思われる。また、先述したように物資運搬の動脈であった東堀河は10世紀初頭には埋まっていることから、辰市の時期には機能を停止していたであろう。こういった調査成果からは、どういった遺構をみつければ市と認定できるのかという問題はあるが、史料にみえるような「賑わう市」を想定し難い状況である。

西村氏は辰市神社を辰市の市神の社地と考え、辰市の場所を神社がある字宮東、宮西、宮北の中心に限定し、この地を辰市の中心とし、左京八条二坊の五～七・十～十二坪を東市域とした(図3参照)。しかし、先の文書が示すように東市が左京八条三坊にあったことは確実であり、八条三坊の東市から八条二坊に想定した辰市への変遷は説明し難くなるが、場所が移ったのであれば、東堀河の埋没等、幾らかの原因があったのであろう。先にもふれた左京八条二坊四坪の調査では、平安時代末から鎌倉時代初頭の土坑や井戸、溝から日常雑器である瓦器椀や土師皿が多量に出土していて、調査地の小字名が「戒」（えびす）であることや、日常雑器が多量に出土したことから、辰市がこの付近にあったのではないかとも考えられている。辰市の所在地については今後の調査に期待がかかるが、もし、左京八条二坊に辰市が想定できるのであれば、そこには市が生まれるような素地があったのではないかとも考えられる。その素地というのが、あながち、もとその場所が東市であったなどということではなかろうか。

おわりにかえて

現推定地の調査では、奈良時代中頃以降の遺構、遺物は見出せるものの、前半にまで遡るものはあまりみられず、東堀河の橋脚の構築時期からもわかるように、奈良時代後半から平安時代初頭のものが多い。こういったことや平城宮の調査成果、都城における左右対称・非対称という視点から、東市に関して日頃疑問に思ってきたことについて、現推定地の調査で検出した遺構の理解に課題を残したままではあるが[9]、今後の調査への「問い」の意味も含め、大方の批判は承知の上であえて東市の移動という見方を試みた。遺物の問題については、絶対量が少ない現状でどれ程の意味をもつのかといったこともあろうし、逆にその少なさが何かを示唆しているのかもしれない。また、現在復元されている東西市の位置は基本的には左右対称形とみることもでき、今回の見方が現段階における東市の理解としてはいささか飛躍したものであることは充分承知しているつもりであるが、市に関する議論が高まることを願う点からも御叱正をお願いしたい。

都城における市の重要性は改めて述べるまでもないことであり、そのことに鑑み、東市跡推定地の発掘調査が行なわれているが、調査で検出されている遺構と文献に記された市の景観とを結び付ける作業は現状では困難が伴なっている。この克服には地道に調査を継続していくことが肝要であろうが、それにより市の実態を明らかにできれば古代の都城研究においても多大な成果となると思われるし、今回述べたような東市に関する諸問題についても解明への手がかりが与えら

よう。20年ほど前までは辺り一面が水田やイチゴ畑で覆われていた東市跡推定地周辺であったが、市道が通り、住宅が建ち並ぶようになり、急速に都市化が進んでいる。都城で市を継続して調査できるところは多くない。改めてこの地域の重要性は考えられなければならないであろう。

以上のようなことがこの小文を成すに至ったきっかけであるが、発掘調査の成果といった具体的な論拠もなく、机上で雑駁に推測を重ねることに終始してしまったことは御寛恕を願うばかりであるが、東市跡推定地の調査を担当した者の一人として今後もこの市の問題については考えていきたいと思っている。

註

1） 東市跡推定地の発掘調査の概要については、奈良市教育委員会『東市跡推定地の調査』Ⅰ～XVを参照していただきたい。

2） 遺物については、現在調査を行なっているところが市のどこかだとしても、市の真ん中やそれを統括する役所（市司）の真ん中にゴミを捨てるということは考え難く、塵芥処理用の溝や土坑がどこかにあると考えるのが妥当と思っている。

3） ただし、十一坪の北辺で検出されたこの築地ＳＡ109、門ＳＢ112と六坪の北辺で検出された築地とは心々間で４ｍ程南北にズレが生じている。また、本文中にも記したが、六坪で検出された築地は雨落溝ＳＤ029から出土した土器が奈良時代前半～中頃のものであり、溝が埋まった後に建物が建てられていることから、この頃に築地が廃絶されている可能性もあり、このズレは時期差とも考えられるが、六坪では造り替えなどの痕跡は検出されていない。十一坪で検出された築地ＳＡ109と門ＳＢ112に関しては、この築地の北を東西に通るＳＤ004と十・十一坪坪境小路南側溝ＳＤ003、第４次調査で検出した南側溝ＳＤ012とその南3.9ｍの位置にある東西溝ＳＤ013との間の空間地の性格も問題となる（左京八条三坊九・十坪で検出された道路状遺構のようなものとも考えられる）。加えて、十一坪北辺では築地が検出されたが、第４次調査での東堀河の西辺では堀河と関連するためか、築地は検出されずに掘立柱塀であったこと、門はＳＢ111、112と造り替えが確認されているが、十・十一坪坪境小路にも造り替えがみられ、時期は不明であるが南側溝が掘り替えられ、路面が南へ拡張されている。これらの関係や、十一坪の門ＳＢ111・112が四脚門であるのに対し、六坪で検出された門ＳＢ199は棟門であることなど、こういったことは時期的な問題と構造的な問題とを含んでいると思われるが、調査範囲が限られた現状では解釈が難しい。解決されなければならない問題は多く、今後の調査での課題であろう。

4） 東堀河にかかる橋は九条条間路との交差点でも検出されている（奈良国立文化財研究所『平城京東堀河－左京九条三坊の発掘調査－』1983）。これらの調査で検出された橋脚の位置や路面と堀河底との関係から、それほど大きな船の往来は不可能であったと考えられている。他の場所でも橋が架かっていたところはあったであろうから、物資輸送と堀河との関係は、水上交通の面からも今後考えていかなければならないであろう。

5） 最近、古代学協会・古代学研究所が左京六条二坊六町の調査をおこない、そこが東市に関連する施設であったと推定している。もしそうであれば、長岡京では東西市は南北にズレる可能性も考えられるが、詳細は未だ不明と思われ、今後の調査の進展を待ちたい。

6） 奈良市教育委員会が行なった平城京第344次調査で、東一坊大路東側溝の約５ｍ東側で南北溝が検出されている（『奈良市概報』平成８年度所収）。報文では築地の雨落溝の可能性があるとされるが、溝間５ｍは築

地の幅にしては広すぎるようにも思われる。この地点から北に約500mのところで実施した平城京第241次調査では東側溝が「一気に埋められたよう」であることが報告されていて（『奈良市概報』平成３年度所収）、第344次調査の所見も同じ様な状況であったという。また、奈良県立橿原考古学研究所が平成６年度に左京三条一坊十二坪で行なった調査でも東一坊坊間路東側溝の３～４ｍ東で南北溝が確認されている（『奈良県遺跡調査概報』1994年度所収）。こういったことから、調査事例が少ない現段階で断定はできないが、東一坊坊間路に改変の手が加えられた可能性を考慮しておきたい。

7）　京の構造は宮にも増して不明な点が多いが、奈良国立文化財研究所が平城京左京三条一坊七坪の調査を行ない、そこが大学寮の一画である可能性が高いことがわかっている（奈良国立文化財研究所『平城京左京三条一坊七坪発掘調査報告』1993）。この地は平安京でも大学寮が置かれた場所にあたり、唐の長安城でも国子監（日本の大学寮に相当）が置かれた区画である。

8）　この辰市の地名の広がりの範囲は東西、南北とも約1.1kmに及ぶ。中世の市の景観や市に関する中世史の研究成果の知識を筆者は持たないが、絵巻に描かれた市の様子や（例えば「一遍聖絵」の備前福岡の市や信濃伴野の市、空也上人遺跡市屋道場）や辰市の名が辰の日に開かれたことに由来するのであれば、それほどの広がりを考えるよりは、ある一定の「狭い」場所に寄り集まって開かれていたものと考えたい。『大和国条里復原図』（奈良県立橿原考古学研究所編1980）によれば「辰市」の地名は左京九条二坊から三坊にかけての地に残る。

9）　一例をあげれば、八条三坊六坪の築地雨落溝ＳＤ029の出土土器が奈良時代前半～中頃のもので、溝が埋まった後、溝を切って建物が建てられていたことは本文中にも記した通りである。築地が奈良時代中頃に廃絶したと考えられるのであれば、奈良時代前半～中頃に宮から離れた八条の地に築地を巡らした坪があることの意味（市でなければ、何であるのか）は考えられなければならないであろう。

【引用・参考文献】

今泉隆雄 1976「所謂平城京市指図について」『史林』59－２　史学研究会

岩永省三 1996「平城宮」『古代都城の儀礼空間と構造』古代都城制研究集会第１回報告集

大井重二郎 1974「平城京の東市より中世の辰市への変遷」『平城古誌』初音書房

岸 俊男 1974「遺存地割・地名による平城京の復原調査」『平城京朱雀大路発掘調査報告書』奈良市

栗林清和 1993「平城京東西市の位置に関する若干の考察」『人文論究』42－３　関西学院大学

篠原豊一 1997「平城京の東市」『考古学による日本歴史９　交易と交通』雄山閣

関野 貞 1907『平城宮及び大内裏考』東京帝国大学紀要工科第参冊

田辺征夫 1988「平城京東市と大和川水運」『高井悌三郎先生喜寿記念論集　歴史学と考古学』

中村修也 1990「平城京建設計画小稿」『古代文化』42－３　財団法人古代學協会

西口壽生 1996「市は一か所か、二か所か」『古都発掘－藤原京と平城京－』岩波書店

西村真次 1933『日本古代経済（交換編第二冊）市場』東京堂

福山敏男 1943「平城京東西市の位置について」『日本建築史の研究』綜芸社

町田 章 1991「平城京」新版『古代の日本』６ 近畿Ⅱ 角川書店

奈良県 1976『平城京左京八条三坊発掘調査概報　東市周辺東北地域の調査』

奈良県立橿原考古学研究所 1986「平城京左京九条一坊五坪・十二坪」『奈良県遺跡調査概報（第二分冊）　1985年度』

奈良国立文化財研究所 1981『昭和55年度　平城宮跡発掘調査部　発掘調査概報』

奈良国立文化財研究所 1994『平城宮朱雀門の復元的研究』

奈良市教育委員会 1982「平城京左京八条二坊二・四坪発掘調査報告」『奈良市埋蔵文化財調査報告書　昭和56年度』

大和郡山市教育委員会 1990『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』